

会報

平成26年6月26日

会 員 各 位

ふるさと語ろう会

会 長 牧 田 孝 男

7月例会「多賀谷氏とあわら市」のお知らせ

先月の例会、宇根観音へは多数ご参加いただき、ありがとうございました。

境内、観音堂、さらに安置されている仏様など、1200年も前に修験者が修行に励んだ所として往時を偲ぶことが十分出来たものと思います。

また、管理が行き届かず、荒れている様子もご覧いただきましたが、私たちの故郷にあるこの古寺が、いま時とともに消滅の状態にあります。

今後いろんな意味での保存活動にご協力をいただきますようお願いいたします。

7月の例会ですが、下記の通り多賀谷左近（墓所）についてです。

多賀谷左近三経公については、別添資料坂本豊主筆「細呂木村誌」抜粋を読んでもいただければその概要がお分かりいただけるものと思いますが、昨年春、地元で墓地の管理を主とした奉賛会が設立されました。

この墓地へは、毎年4月の「ふるさとの道歩こう会」や過日開催された「おもてなしウオーキングあわら大会」など、参加の方々多数にお立ち寄りをいただいております。

また最近では、あわら市も三経公の前任地である茨城県下妻市と交流を行っており、今春の下妻市「多賀谷氏時代祭」には市長をはじめ議会代表や奉賛会が団体で参加するなど、400年の時を超えたご縁を温め合っております。

この機会に、会員各位も墓地のほか屋敷跡など、現地を見ていただければと思います。

記

期 日 7月12日（土） 午前10時開会

会 場 あわら市清王 さくらセンター会議室（左近墓所の前）

説 明

- 福井藩主結城氏の入部と多賀谷家 （会員 長谷川氏）
- 墓所の保存と館跡について （奉賛会 酒井敏雄氏）
- 墓所において改修経緯と石廟再建について （会員 吉村）

二 柿原の郷と多賀谷左近

「柿原の郷千戸」 昔の北陸街道は、金津から柿原台地を通過して、細呂木を経て加賀の橋へ通じていた。その頃、この道ぞいの村々は、大変繁昌していた。ことに徳川時代のはじめ、多賀谷氏(三三、〇〇〇石)の館(小城)が柿原十楽にあつた頃は、その御城下として、柿原台地の村々の最もさかえた時代であつた。ただその御城下期間は大変短かつたので、武生のように市街地にはならなかつた。「柿原の郷千戸」といういい伝えは、その頃のことではなからうか。徳川時代の文書を見ると、柿原台地の村々をすべて柿原、柿原十楽、柿原清王、柿原西方寺といい、指中も田中中村と区別して、柿原中村といつている。柿原の郷千戸というのは、多賀谷家臣の家も含めてのことであろうか。とにかく大した繁榮ぶりであつた。照蔵寺が柿原台地に目をつけて、福井の幾久から移つて来たのも、この繁榮と重要さを見たからであろう。今でも関西方面では、照蔵寺のことを柿原様と呼んでいる。

柿原台地に発達した四つの部落(柿原・十楽・清王・西方寺)は畑を開墾している中に、地境が入り交つて、飛び地もできた。

柿原台地の太閤検地も、慶長三年七月に行なわれたもので、豊臣秀吉の死亡直前であつた。村高は

柿原 八二石八二五合 山十楽 二七八石五二升 清王 一七石四二升 西方寺 五四石五五升

であつた。村高がきまり、村の庄屋がきまると、年貢は村ごとに集められて、庄屋が領主へ納めるのであつた。

多賀谷左近と柿原の郷 柿原郷発展の一番大きな原因は江戸時代の初、多賀谷氏の館がおかれたことであろう。結城秀康が父家康から越前六八万石をもらつて、慶長六年五月に入国し、北ノ庄に居城を構えて、領内各地に家臣を封じた。柿原を中心とする坂北郡の村々の総高三三、〇〇〇石は、結城以来の家臣、多賀谷左近三経に与えて、柿原郷の要害を守らせたのである。この事については三八、九頁に詳かに述べておいた。

柿原の郷四カ村は、その頃北陸街道に接し、古来軍事上の要害の地であつた。加越の国境を侵すものは必ずこの街道を進軍した。秀康は多賀谷左近を柿原の鎮として、細呂木関所を守らせ、加賀百方石の前田侯に備えた。多賀谷左近の館は、今の照蔵寺前の島の畑を、ほとんど全部を占めていた。旧国道に沿うて連る細長い田は、昔はこの館の堀であつた。多賀谷左近は治政僅かに六年、四一歳の男盛りで、慶長十二年七月になくなつたが、柿原郷は一時、政治、文化、交通、軍事等の中心となつた。また百姓の要望をいれて橋屋、樋山、澁等に大きな溜池を造つたと伝えられている。

多賀谷氏は二代で亡んだ。そして慶長十八年に金津に奉行所が設けられ、知行千石の森宗右衛門が、初代の代官になつて、鉄砲組二六人がつけてあつた。多賀谷氏の亡んだ後の柿原領は、福井金津領となり、後公料・丸岡領・西尾領と分知された。ことに柿原と指中は武生の本多富正の領下となつた。

多賀谷左近の館跡 柿原台地の中心地、柿原郷の中央に、多賀谷左近は館をかまえた。館(たち)は小規模な城の意味で、幅五〇間(一〇〇米)の長い壕を廻らし、一城郭をなしていた。そして山十楽・清王・柿原はその城下町となつた。照蔵寺前から旧国道を横切つて、お堀の跡を進むと「見花場(けんかば、地字名)がある。昔、この辺一帯が桜の花見場でお堀の水に影をうつしていたのだろうか。十楽にも清王にも「さくらがいち」という所があるが、武将の風流がしのばれる。また千束部落から坂をおりてお堀跡を渡るあたりを「一ツ橋」といつて古城の一ツ橋を物語っている。

越前名蹟考に「柿原十楽村の内四拾間(に六拾間許の所堀の形あり」と記しているが、今日でもその堀はもつともつと長く大きく、十楽のお宮の下から清王の元学校跡までのびて島の島一帯を取りまいている。今は埋立てて田になつているが、田面は四米も低く、林ノ下・大坪・黒谷・隠屋等は深田であぶみをつたつて仕事をしなければならぬ。

堀にかこまれた館跡は十楽部落の島と呼ばれる畑で、広さ約一〇町歩もあろう。中に屋敷割(武士の屋敷割)泉久保・御馬屋・見花場・狐塚・向山等の名が残つている。多賀谷左近の居室はどの辺にあつたか、荒馬のかけ廻つた馬場や弓矢・鉄砲の的場もどの辺であつたか、今は夢の如く、農道が縦横に通じ中央に県の農事試験場がある。

館跡には石一つ見当らないが、十楽のお宮付近の道や照蔵寺境内の石段の両側につかつた板石は、皆この館跡から持出したものだといふ。

多賀谷左近の墓 柿原部落の春日神社の前に「墓堂」という地字があつて路傍に、五輪墓と坊主の墓が数基ある。五輪墓は鎌倉時代から身分のある者に作られていた。そして坊主の墓は無縫塔(卵塔)に限つていた。江戸幕府は

法名の外に俗名を彫らせることにしたが、これは死者が切支丹信者でなかつたことを証明するためであつた。

左近三経の墓は高さ二三尺(三米余)で、台石の上に地水火風空の文字を刻んだ墓石が重つている。最上頂は如意珠形、次は半月、次は三角、次は円、次は方といひ、仏教の五大の思想を象^{ホト}とつたもので、五大というのは五塵から生ずる地水火風空の五種の性である。万物ごとごとく、この五因数に帰するので大というのである。

墓石に「造奉立石五輪堂墓多賀谷左近」「點宗神堅居士」「孝子敬白」「慶長十二年丁未七月二十一日」と刻んである。越前史略には「慶長十二年七月二十一日多賀谷左近三経卒す、年四十一、邑の西に葬る、その子左近封をつぐ、後故あつて祀を絶つ」と謎のような文句を書添えている。墓は久しく建てられなかつたが、寛文二年(一六六二)左近三経の死後五五年目に、その子孫虎千代によつて、柿原墓堂の地に、五輪塔が再建された。

多賀谷家の菩提所は柿原の専教寺で、慶長の頃、左近三経の弟多賀谷光之助が専教寺七代目の住職となつている。

(専教寺伝記)

多賀谷左近の家譜 多賀谷氏の事は天竜山門福寺(茨城県下妻)の記録に詳しい。多賀谷氏はもと上総介平高望から出ている。高望八世の孫を村山重遠といひ、重遠の子金子宗忠は源義朝につかえて保元乱に功を立てた。そして、武蔵国金子の地頭職に任せられた。その子宗政が多賀谷の地頭となつてから、その地名を姓とした。宗政から五世の孫家茂と家茂の子政朝は、応永の頃、結城に来て、結城溝広に仕え、溝広の子高経を養子にした。高経は戦功によつて、関の庄三十三郷を与えられ、下妻城を再興したのであつた。高経の孫を重政といひ、重政の孫重経は、天正十八年、小田原の戦で豊臣秀吉に帰伏し、その命により結城氏に仕え、下妻城を修理した。その子虎千代が一五才になつた時、石田三成は烏帽子親となり、三成の三と重経の経をとつて多賀谷左近三経と名のらせ、下野国岡田郡大田の城主にした。

慶長五年関ヶ原の戦の時、重経は会津の上杉景勝と謀を通じ、小山城を護うとしたが、石田三成の軍が大敗したので中止した。戦がおさまると江戸から使が来て、重経を詰責したので、逃れて府中にかくれたが、慶長六年叛跡が明らかとなつて、所領六万石は没収され、亡んでしまつた。(武徳編年集成)

一代限りの柿原鎮 徳川秀康は、その重経の子多賀谷左近三経を引きつれて、慶長六年五月越前に入国し、三経に坂北郡下に三三、〇〇〇石を与えて柿原の鎮とした。北陸道を通る大名は主として加賀の諸藩で、金沢の前田侯は帰途、左近の館に立ち寄り、歓待されたことがある。そんな時でも左近は直ちに早馬で北ノ庄(福井)へ通報するのであつた。

初代左近の治領はわずか六年であつた。藩主徳川秀康は慶長十二年四月三四歳でなくなると、左近三経もがっかりしたのであろう。その年の七月、四一歳でなくなつた。その時藩主松平忠直(福井藩二代)は下妻(茨城県)に行つていて、左近死去の報を聞いたが、別に心を痛める様子もなく、幕府の方針に従つて、左近の子(二歳)には後職をつがせないことにした。越前御代規録には「下妻に被成、御座内、多賀谷左近死去。子息二歳、有故、跡式繼絶に付、酒井外記、奉して越前に申来る」と書いてある。越前史略には「その子左近封をつぐ」と書いてあるが、確かでない。

多賀谷左近と本多富正 越前藩家老本多富正(武生藩)は早くから金津宿場の重要性に注目して多賀谷左近の死後柿原の八八二石と指中村の中七七二石を藩主忠直からもらつた。富正は更に自分の居城を金津に構えようと思つて、藩主忠直をお願いしていた。忠直も同意して江戸からの手紙の一節に「申すに及ばずゆえども、御年寄中へ諸事相談せられ早速持あきひ様に才覚肝要にゆ」と藩府へ運動するようにすすめたのであつた。しかしこれは遂に実現せず、本多富正は、改めて府中に城を築いてここに移つた。

多賀谷氏は越前へ来て僅か六年で、城主は死ぬし、子供は僅か二歳で跡式は立たず、菩提寺(専教寺)も一時廃寺同様になつてしまつた。まことに哀れである。

案内図

